

処女墓の歌に追同する一首 并せて短歌

四二二一番

古いにしへに ありけるわざの くすばしき 事ことと言いひ継つぐ
千沼ちぬ壮士をとこ 菟原うなひ壮士をとこの うつせみの 名なを争あらそふと たまき
はる 命いのちも捨てて 争あらそひに 妻つま問まひしける 処女をとめらが
聞きけば悲かなしさ 春花はるはなの にほえ栄さかえて 秋あきの葉はの にほひ
に照てれる あたらしき 身みの盛さかりすら ますらをの 言ことい
たはしみ 父母ちちははに 申まをし別わかれて 家いへ離ざり 海うみ辺へに出いで立たち
朝夕あさよひに 満みち来くる潮しほの 八重やへ波なみに なびく玉藻たまもの 節ふしの間ま
も 惜をしき命いのちを 露つゆ霜しもの 過すぎましにけれ 奥おくつ城きを こ
こと定さだめて 後のちの世よの 聞きき継つぐ人ひとも いや遠とほに 俣しのひに
せよと 黄楊つげ小櫛をぐし 然しか刺さしけらし 生おひてなびけり

四二二二番

処女をとめらが 後のちのしるしと 黄楊つげ小櫛をぐし 生おひ変かはり生おひて
なびきけらしも

四二二三番

あゆをいたみ 奈呉なごの浦廻うちみに 寄よする波なみ いや千重ちへしきに
恋こひ渡わたるかも